

動画作成学習を用いた性教育指導に関する講義の学習効果 —性教育に対する恥ずかしさと自信の程度に着目して—

郡司菜津美（国士舘大学）

キーワード：性教育指導，教員養成，動画作成学習(PBL)

問題と目的

性教育そのものに関する研究に比して，教員養成における性教育指導に関する研究は国内外においてほとんど見当たらない。本研究では，性教育指導に関する研究的知見を得るため，動画作成学習を用いた性教育指導に関する講義の学習効果を性教育指導に対する①自信と②恥ずかしさの観点から明らかにすることを目的とした。

方 法

筆者が担当する関東圏内私立大学教職必修科目「教職論」（受講者70名；A組37名，B組33名）における性教育指導についての講義を本研究の対象とした。講義の手法には「動画作成学習」を採用した。動画作成学習とは，与えられた課題に沿ってグループで動画を作成することで学習内容の定着及び活用を目指した手法であり，本研究では「性教育の指導場面を含んだ1分動画の作成」を課題とした。講義の前後に質問紙調査を行い，①性教育実施に対する自信の程度（5件法）とその理由（自由記述），②性教育実施についての恥ずかしさの程度（5件法）とその理由（自由記述），③（講義後のみ）講義の感想（自由記述）の3点を尋ねた。5件法の回答は χ^2 検定及び t 検定を行い，自由記述の回答はKJ法を用いて分類し，検討した。また動画作成学習時の学生の様子は，授業者の授業メモを用いて分析した。

結果と考察

講義前，2クラスの①②の回答の平均値に有意差がなく，自信の程度・恥ずかしさについてクラス間で差はなかった。

授業者が捉えた両クラスの学生の様子

A組は動画作成の話し合いが活発で，教師が介入することはほとんどなかった。一方B組は動画作成の話し合いが活発ではなく，教員がファシリテートする機会が多かった。以下の結果にはこうした授業の有り様の影響が想定される。

「自信」の程度

「とても」～「まあまあ自信がある」を「自信有群」，「どちらともいえない」を「中間群」，「あまり」～「全く自信がない」を「自信無群」とし，3群の人数について講義の前後で比較したところ，講義前は人数に偏りはみられなかったが（ $\chi^2(2)=3.258$ ， ns ），講義後はクラスごとで群間の人数に偏りがみられ（ $\chi^2(2)=7.866$ ， $p<.05$ ），

B組よりもA組の方が自信有群の人数が多かった（Table 1 参照；後述）。理由について，講義前後ともに「知識のなさ」と記述した学生が最も多かったことから，性教育指導に関する知識の有無が自信の程度に影響を与える可能性が示された。

「恥ずかしさ」の程度

「とても」～「まあまあ恥ずかしい」を「恥有群」，「どちらともいえない」を「中間群」，「あまり」～「全く恥ずかしくない」を「恥無群」として3群の人数について比較したところ，講義の前後でクラス間に人数の偏りは見られなかったが（ $\chi^2(2)=0.315/0.016$ ， ns ），「恥有群」と「恥無群」の人数について，講義の前後で人数に偏りがあることが示された（ $\chi^2(2)=27.460$ ， $p<.01$ ）。理由について，講義前は「自分は大丈夫でも生徒や周りの反応が恥ずかしさを誘引する可能性」に言及するものが最も多かったが，講義後は「恥ずかしさがあっても性について教えることは大事であり当然のことである」とするものが最も多かった。これらの結果から，性教育指導に対する責任感が芽生えたと理解された。

Table 1 自信及び恥ずかしさの程度について

単位(人)	A組			B組		
	自信有群	中間群	自信無群	自信有群	中間群	自信無群
事前	6	9	22	2	5	26
事後	17	12	8	5	15	13
	恥有群	中間群	恥無群	恥有群	中間群	恥無群
事前	15	7	15	13	8	12
事後	7	7	23	6	6	21

講義の感想（両クラスの差異）

A組は全50切片的のうち，「リスク(6切片)」のカテゴリが最も多く，他者との共同に関する内容が主に記述された。一方でB組は全61切片的のうち，「学習の機会(7切片)」のカテゴリが最も多く，個人の体験に関することが主に記述された。

結 論

動画作成学習という学習形態(PBL)によって小集団活動が賦活されたが，小集団活動の活発さと講義後の自信の程度に連関がみられ，不活発なクラスは教師の介入では改善しなかった。小集団活動は偶然の影響する共同作業であり，初期状態の活発さの影響が少なくないことが予想され，事前のグルーピングの工夫も含めたPBLの有効化の仕掛けが重要であることが示唆された。